



校内音楽会に向けて

10月31日(火)の校内音楽会が近づいてきました。そのことを肌で感じた出来事があります。昨日の朝17日(火)に体育館に6年生の子供たちが続々と集まってきました。後を追ってみると、体育館に音楽会で使用するひな壇を設置するために、集まってくれていたのです。年に一回の音楽会ですが、こうして6年生の姿を見ると、今年も帯西の風物詩を感じる事ができます。6年生と職員とが力を合わせて、音楽会で使用するひな壇を運んでくれています。さらに、昼休みに5年生が体育館に楽器を運んでいる姿がありました。この様に学校のために、「帯西イエロー」の中の一つである「役割を自覚し、よりよい学校をつくる」のピースの心を発揮してくれる姿に頼もしさを感じました。高学年に感謝をしつつ、帯西の次のリーダーを担う5年生にもその姿が受け継がれていて、嬉しく思いました。

体育館から校長室に戻ると、どこかの教室から子供たちの歌声が聞こえてきました。子供たちに一人一人が音楽会に向けて気持ちが高まっているようです。



インバウンド都市だった太宰府

最近、「インバウンド」という言葉を新聞やニュースで見聞きしたことがある方は多いと思います。インバウンド(Inbound)とは、の日本語で「外から中に入ってくる」「内向きの」という意味があります。旅行業界では「外国人が日本に観光をしに来る」という意味で使われています。最近では、円安も相まって、多くの外国人観光客や外国人ビジネスマンが日本を訪れています。こうした背景があり、ニュースや新聞でも「インバウンド」という言葉を目にする機会が多くなってきました。

さて、日本の観光の聖地である京都が、日本の政治の中心地になり始めたのは平安時代です。その都だった平安京にも外国人などの僧侶がたくさん行き来し、インバウンド都市だったようです。そのインバウンド都市を作り上げた要因の一つが、遣隋使・遣唐使というシステムです。当時、奈良や京都と並ぶインバウンド都市が、福岡の太宰府でした。菅原道真が左遷され、道真はそれを憂っていました。太宰府には大宰府政庁という外国に対する窓口があったのです。

有事には軍事拠点となった大宰府政庁ですが、平安の時代には外交の拠点でした。また、博多には迎賓館でもあった鴻臚館も置かれ、中国や朝鮮半島からの使者の宿泊施設、遣唐使が旅支度を整える施設にもなっていました。博多から太宰府にかけての地域は、京都の人も知らない文明の最先端都市で、実際は華やかなインバウンド都市だったのです。



「東風(こち)吹かば にほひをこせよ 梅の花 主なしとて 春を忘るな」

道真は、遣唐使の廃止を提言した張本人でした。その後、陰謀によって左遷されることを憂いてこの歌を詠みましたが、その後日本独自の国風文化が生まれていき、道真は神格化していったのです。